関東における心敬の位置

――『故事本語本説連歌聞書』考（承前）――

竹島一希

はじめに

カリフォルニア大学バークレー校蔵『故事本語本説連歌聞書』（以下『故事』）[1]を主題に据えて論じたものは、渡辺守邦「資料紹介　U・C・バークレー校蔵『古事類』――もう一つの『連集良材』――」（以下渡辺論文）[2]が唯一のものであった。それを受けて、「故事と連歌と講釈と――『故事本語本説連歌聞書』――」[3]（以下前稿）で、『故事』の成立状況を具体的に追究した。本稿は前稿を補い、『故事』所収の連歌関連記事を再吟味し、そこに示唆される関東連歌壇の様相を検討することを目的とする。

議論に入る前に、『故事』に関して現段階で判明していることを挙げておく。なお、渡辺論文で明らかになった事柄に（渡）、前稿で明らかにした事柄に（前）の記号を付す。

・本書は133の項目から成るが、通し番号[4]106以降は『歌林良材集』「有由緒歌」の抜き書きである。（渡）

・本書は、「故事本語本説連歌聞書　上」、「同　下」（内題に見えない）、『歌林良材集』抜き書きその他が合わさった、「古事類」と呼ばれる連歌参考書であった。（渡）

・『故事』には親本段階での脱落や欠損に起因すると見られる余白や記事の中断が複数箇所存する。（渡）

・『故事』では同じ言葉がしばしば反復するが、それは「聞書」らしい冗長さの反映である。（渡）

・「大原野千句」が「当世」の作として引用されることから、『故事』は元亀二（一五七一）年以降一五九〇年あたりの成立と見られる。（前）

・『故事』に見える、珠易、（横手）繁世、尚能（新田尚純）、芳能（芳純）は、宗長や宗牧と関わりのあった連歌好士であろう。（前）

・（横手）繁世、尚能（新田尚純）、芳能（芳純）といった、上野国新田（群馬県太田市）を領する新田岩松氏に関係す

る人々の句を掲載することから、『故事』は新田氏の周辺で編纂されたと推定できる。（前）

『岩橋』

『故事』には多くの連歌が引用されるが、出典を確認できた句の中には、その字句、また作者名にしばしば誤りが存する。次の例を見よう（『故事』を引用する場合は、考察の対象とする部分のみ掲出する。以下同）。

21一、文王語

世をかへり見るこゝろはづかし
虎の臥山のをくにもすまひして　心敬
はげしき心とらはものかわ
聞もこしさもからき世のまつりごと　専順
しらぬ心はもろこしの人
虎のすむ山より世やはつらからん　宗祇

此心は、周の文王狩したまい、ある山中を通給ひしに、女壱人鳴かなしみ居けり。汝なにとて鳴ぞと問給へば、我が父虎に取らる。妻虎にとらる。今又我子虎にとらると云。其時文王、なんぞ立さらぬとの給へば、其御返答に、此山に苛政なしと申。其時、文王言に、苛政猛(タケシ)ニ於虎。苛政とは、租税の事、十之一ニシテ而税也とて、年貢は公界へ十のものをひとつたてゝ、九は妻子眷属をはぐくみ、食衣ためにす。租税とはねんぐの事也。

掲出句の出典は、心敬句は「世をかへりみる心はづかし／とらのふす山の奥にも住ゐして」（春夢草〈内閣文庫本〉・七六四）の肖柏句、専順句は「はげしき心虎は物かは／きくもうしさもからき世の政」（愚句老葉・一七四七）の宗祇句である。そして宗祇句は、宗祇作であることは正しいが、句形は「しらぬこゝろはから国の人／虎のふす山より世やはつらからん」（新撰菟玖波集〈実隆本〉・雑三・二九三五、下草〈金子本〉・一一八六）である。

さらに、この三句が「苛政猛於虎」（礼記・檀弓下）の故事を典拠とするという指摘は正しい(5)。しかし、故事の主体を「周の文王」とするのは不可解である。原文は「孔子過泰山側。……夫子曰、小子識之、苛政猛於虎也（孔子泰山の側を過ぐ。……夫子曰く、小子之を識せ、苛政は虎よりも猛なり、と）」であり、主体は孔子であるはずである。この21「文王語」においては、引用句の作者、また句の措辞、さらに故事の主体等、不正確な情報が散見されるのである。

このように、『故事』の引用句、作者名には誤記が多い。渡辺論文の指摘の通り、『故事』は「聞書」であり、その本文には聞き書き特有の書き誤りも存する。しかし、一部の文献については、かなり正確に引用する(6)。連歌作品に限れば、心敬の

句には有力な出典を推定できる。（以下、傍線は私による）

44一、雪山童故事

もとのさとりを心にはゑん
色にそむ花を一ふさわが折て　　心敬

世尊不説の説、迦葉（セウ）不聞の聞
さま〴〵にとけどとかれぬことのはをきかずして聞人ぞすくなき

此心は、大慈世尊、涅槃に入たまゑるきはに、唯一大事因縁正□覚得をあらはさんとて、花を一房拈（タヽツ）てあげ給ふ。しかるに、我はさとりを得ることなくて、色にのみそみて花を折と、心敬卑下の御句也。世尊拈花、迦葉尊者破顔微笑、□金襴衣を附属し給ふに、徒らに花を折、さとりを得ぬ事をなげくよしなり。

もとのさとりをこゝろにはえず
色にそむ花を一ふさわが折て

大覚世尊、涅槃にいり給へるきわに、一大事因縁をさとりえたる心をあらはさんとて、一ふさの花を折てあげ給。迦葉微咲し侍るに、われはまよひの色にそみて折事のつたなきに思合侍り。（芝草句内岩橋・一〇七）

『芝草句内岩橋』（以下『岩橋』）は、「文明第二暦初秋日（一四七〇年七月）」、「奥州会津」にて「興俊大徳」の依頼により編んだ、心敬の自注付歌・句集である（奥書）。『故事』に引用される「さま〴〵に」歌は、「世尊不説之説、迦葉不聞之聞といへる心を／さまざまに説けども説かぬ言の葉を聞かずして聞く人ぞ少なき」（新拾遺集・釈教・一四七八・夢窓疎石）であるが、歌題は、「穴問真云、作展生是世尊不説説。迦葉不問問」（大慧普覚禅師語録）が典拠である[7]。この和歌は『岩橋』には引用されない。しかし、両書の叙述の順序はほぼ一致し、なによりも心敬句を「卑下の御句」と的確に捉えているところに注目すべきである。

『岩橋』の付合「もとのさとりをこゝろにはえず／色にそむ花を一ふさわが折て」は、釈尊が「一大事因縁をさとりえたる心をあらは」そうとして「一ふさの花を折てあげ」たところ、ただ摩訶迦葉独りがその意図を悟ったという拈華微笑の故事（無門関・第六則他）に対して、「われはまよひの色にそみて」花を折るだけだと、「さとりをこゝろにはえ」られないことを歎く句である。

それに対して、『故事』所収付合では、前句の句末が「心にはゑん」と、肯定表現になっている。『故事』所収本文に沿うならば、花を一房折り取って、釈尊と同じ悟りを得たいという、『岩橋』とは逆の句意になるはずである。しかし、『故事』は「我はさとりを得ることなくて」、「心敬卑下の御句」、「徒らに花を折、さとりを得ぬ事をなげく」というように、『岩橋』本文と同様の解釈を行っている。つまり、『故事』は、句本文と

注釈内容が齟齬しており、その注釈内容は『岩橋』に近接する。これは、『故事』の講義・執筆に、『岩橋』が参照された可能性を示していよう。

もう一例挙げよう。

65一、葬送竹禁

ひけるたもとぞいとゞぬれそふ
なき人を送れる野べの琴のこゑ　　心敬

わかれてはいつはためぐりあひもみん
なき人をくる野べの小車　　同人

大唐にては、貴人の葬送には、車にて管弦にて送ると也。車にてそのまゝ埋と也。是をみさゝぎとかみつきとも云。みふたはねと云事、二年にても三年にても、又四年あつても、みさゝぎの○土かさぐることあり。是をみて奏すれば、御祝ありと也。但、是は崩御にばかりかぎるとなり。又平人をも車にのすると也。顔回死時も、父放路、孔子の車をかれと見えくてたり。

ひけるたもとぞいとゞぬれそふ
なき人をくれる野べの琴のこゑ

葬送に、竹林楽などゝて、楽をして送る。

別てはいつはためぐり逢もせむ
なき人をくる野べのを車

名だかきかたなどをば車にてをくりて、そのまゝうづみ侍るを、御陵と申など也。大かたの人をものせて送る歟。顔回などが時、父の顔路、孔子の車をかれると見えたり。

（岩橋・三〇一、三〇二）

65「葬送竹禁」の二句は、『岩橋』三〇一、三〇二に連続して収められる。それぞれの付句が、「なき人をくれる野べ」（三〇一）、「なき人をくる野べ」（三〇二）とあるように、二句の内容は非常に近い。そのため、『故事』では一括で扱われるのだろう。読み比べると、『故事』は『岩橋』の二句の注釈の間に「みふたはね」（御蓋撥か。未詳）の注を加えていることが分かる。なお、65の標題「葬送竹禁」は、もとは『岩橋』のように、「葬送竹林楽」ではなかったか。竹林楽を理解できなかった書写者が、「林楽」の崩し字を「禁」と誤ったのだと思われる。「楽」の草書体が「示」字に似るからである。

心敬[8]は、応仁・文明の乱を避けるため、応仁元（一四六七）年四月二十八日に都を出立、伊勢を経由して、おそらく五月末に相模国品川（東京都品川区）に居を構えた。心敬の品川下着後、品川で連歌会が頻繁に催され、宗祇も会いに来るなど、心敬の名声がすぐに広まったことが窺える。『岩橋』を授けられた興俊（後の兼載[9]）も心敬に入門した一人で、文明二（一四七〇）年正月の「川越千句」に同座する。その後、心敬は同

年の春ごろ奥州へ旅立ち、夏に会津に到着する。心敬は会津出身の兼載に会津まで案内されたのである。兼載は会津滞在中の心敬に『岩橋』を乞うなど、関係を深めていった。その後、心敬は文明七（一四七五）年四月十六日に相模国大山の石蔵（神奈川県伊勢原市）にて死去し、兼載は上京して連歌師として活躍した後、文亀元（一五〇一）年以降は岩城平（福島県いわき市）に移住した。さらに晩年は下総国古河（茨城県古河市）に過ごした。このような経緯を考えれば、『岩橋』が関東で受容されることは自然である。

『故事』は『岩橋』所収句を23句引用する[10]が、自注部分まで引用することは少ない。しかし、上記二例と同じ程引用が顕著ではない箇所でも、心敬が自注で言及する典拠を正しく把握し、それに沿った標題のもとに掲げている。その唯一の例外が、44「雪山童故事」で引かれる「入て見よむら山白き園の雪　心敬」である。

この心敬句は、「まことの鬼にいかゞむかわん／鳥の音も猶すさまじき雪の山　宗祇」など三句とともに掲出される[11]。出典の判明する「まことの鬼にいかゞむかはん／鳥の音も猶冷しき雪の山」（愚句老葉・六九七）、「鳥のこゑきけ雪の山里／常ならぬ身をやすくとは思はめや」（愚句老葉・一五九七）の典拠は寒苦鳥の故事である[12]。一方、心敬は寒苦鳥を典拠として作句したわけではない。

入て見よむら山しろきそのゝ雪
　暁梁王園に入ば、雪郡山にみつと云心のみ也。
（岩橋・八六）

自注には、典拠として「暁入梁王之苑、雪満群山。夜登庾公之楼、月明千里（暁梁王の苑に入れば、雪群山に満てり。夜庾公が楼に登れば、月千里に明らかなり）」（和漢朗詠集・巻上・冬・雪・三七四・白賦）を掲げる。心敬句の「入」、「むら山」、「そのゝ雪」は典拠の訓読であり、それを本説とすることは動かない。作句する心敬の念頭に寒苦鳥の故事は浮かばなかったであろう。この一句以外の心敬句は『岩橋』を出典とすると考えて良いと思われる。

仮託と伝承

『故事』には典拠未詳の和歌、連歌も多いが、判明した典拠には珍しい連歌論書も見られる。

53一、趙洲庭前柏樹
　西より来る法のみちかは
　色かへぬ樹のかげはしづかにて　　宗長
　　此句、宗祇○宗長墓佐三問答前句付の句也。
　西より来る法のみちかは

にほひふかく水の花咲夏の池　　基助

日本記に、水の花は蓮は事也。此花、西方浄土より飛来り、醍醐味にまじはると也。小乗は四大四味とたつる也。四味を解(げ)して醍醐味を得て、大乗妙典也。苦、甘、辛、鹹。

しみとけて醍醐の池に咲花は皆妙法の蓮花なりけり

標題は、『無門関』第三十七則の、趙州従諗とある僧侶との問答に発した公案である。ある僧侶に「如何是祖師西来意（如何なるか是れ祖師西来の意）」と問われた趙州は、「庭前柏樹子（庭前の柏樹子）」と答えた。宗長句は、前句の「西より来る」を問いの「西来」に、付句の「色かへぬ樹」を答えの「柏樹子」（常緑の柏）とする付けである。一方、基助（桜井基佐）の句は、典拠そのままに付けるのではなく、「夏の池」に咲く「水の花」によって転じる。「水の花」とは蓮華のことで、蓮華の花（妙法蓮華経）に代表される仏法が日本に既に根付いていたことを付ける。

この句の出典とされる「宗祇○宗長墓佐三問答前句付」は、『大原三吟』のことである。『大原三吟』は、宗祇と宗長、基佐の三名が、同じ前句に付句を試み、互いの句を論評し合う連歌論書である。その三十六番に、「西より来る法のみちかは」の前句に対して、

西より来る法のみちかは
海ぎはも遠き東に舟見えて　　祇
色かへぬうへ木の陰は静にて　　長
匂ひふかく水の花さく夏の庭(池イ)　　佐

の三句が付けられる。さらに、論評部分には、

祇長問、水の花の句承不知候。如何。佐答、是は日本記よりまうけたる句也。水の花と申候は蓮なり。此花、西方浄土より飛来て、醍醐味にまじはると云り。然間歌に、

しみとけてだいごみの池に花さけば皆妙法の蓮花也けり

いづれも是をかんず。

とある。宗祇と宗長が基佐に句意を問うと、基佐は「日本記よりまうけたる句」であると答えた。「日本記」には、蓮のことを「水の花」と言い、蓮が「西方浄土より飛来て、醍醐味にまじはる」とあるという。しかし、もとより現在の『日本書紀』にそのような言説は見出だせず、これも中世日本紀の一つに数えられる。

『大原三吟』からの引用はもう一例見られる。

50一、砂為仏塔

石をあつめてたよりにぞなす
いときなきも終にやいらん法の道　宗長

乃至童戯、聚砂為仏塔。

かりそめに重ぬる石のみ仏も後は闇路のしるべをやせん

法花経文の心を貫之よめり。

石をあつめて便にぞなる（すイ）
とだえせぬ流の末のよこ堤　祇
いとけなきも終にやいらん法の道　長
程ふらばそこともしらじなきが跡　佐

……祇佐云、石を便にといふに尺教をあそばし候事如何。長答、されば法花経に、乃至童子戯、聚沙為仏塔と云り。石をあつめ砂をかさぬるも仏となるといへば、如此申候。其上、貫之歌に、

かりそめにかさぬる石の御仏を後のやみぢのしるべとやせん

余是をかむず。　（大原三吟・三十三番）

「乃至童子戯、聚砂為仏塔（乃至童子の戯れに、砂を聚めて仏塔を為れる）」（法華経・方便品）、そして出典未詳歌を貫之詠として引用する点も含めて、『大原三吟』の引用と考えて良い。『大原三吟』には宗祇と宗長、基佐の三名が登場し、巻頭にも「文明十四年神無月之比」とあるため、文明十四（一四八二）年の成立であるように見える。だが、『大原三吟』に関する長谷川千尋氏の研究[13]（以下、長谷川論文）によれば、所収の計一二〇句の出典を確かめられない点より、この年紀、作者は仮託と考えられる。そこで、京都大学附属図書館本の書写年紀である慶長三（一五九八）年が成立の下限とされた。今回、『故事』に『大原三吟』の引用が確かめられたから、『大原三吟』は少なくとも『故事』の成立に先んじて、おおよそ一五八〇年頃には成立していたと考えられる。

『大原三吟』と同じく著名連歌師に仮託された連歌論書『基佐心敬問答』について、長谷川論文は、『基佐心敬問答』と『大原三吟』とが「極めて近い環境で成立した」と推定する。実は『故事』にも、『基佐心敬問答』の一節と見られる引用が見出せる。

49一、飲酒戒

武蔵野に法を付ることは、宿空上人、武蔵野に草庵を結び、草の爪木をひろい、をこない給ふ。ほりかねの井も此上人のあかいのよし、申つたう。ほりかねとは、水の出がたき井なれば、ほりのねたる（かカ）井也。

がきの目にこそ水はとをけれ
ほりかねの井はほどゝをし八瀬の里

とつけ給ふを、心敬の御判に、ほりかね井、やせのさと、がきに同意の連歌也との給ふ。我ならばとて、

海川の流は四方にみち〳〵て
　これらにてこそ餓鬼の首尾なると、しるし給ふ也。但又、ほりかねの井を付るとも、

人によるほりかねの井も法のため
　これにて付べきとなり。

諸人存ずる連歌を以て、当世・中古の理をしへたてまつるべし。

がきの目にこそ水はかたけれ
　といふ句に、

ほりかねの井は程遠しやせの里
　と申事、是をすゝめ連歌と可申候哉。がきにてあらずといふとも、ほりかねは水有まじく候。やせの里にては、がきならずともやせ可申哉。それのみにかぎらず、ほりかねはむさし、やせの里は中国にて候。されども、此作者、細工をえたる者にて、遠きと云字をよく置候や。そのゝちの好士、是を笑て、我ならば、

海河のながれは四方にみち〳〵て
　とこそ申度とぞ候へども、一ふしいまみれば、よくもなかりけり。当世ならば、

草木だに露を命のならひにて
　とこそ申て、うきなを不敏（取カ）なれ。雨露のめぐみにて草木ももゑわたりさかん成に、がき、いかなれば水をまふけぬぞと付てこそ、ふびんの方も侍るなれ。あいかまへて、此三句を、むかし、中比、いまのかはりと心をかけて見給ふべきにや。是等を連歌のよき先達と可申候哉。

（基佐心敬問答）

まず、『故事』には、一つの前句に対して、三つの付句が提示される。

がきの目にこそ水はとをけれ
A　ほりかねの井はほどゝをし八瀬の里
B　海川の流は四方にみち〳〵て
C　人によるほりかねの井も法のため

前句は、餓鬼道に堕ちた者の目の前から水が遠ざかってゆく苦しみを詠じている。そこで、Aの「がきの目にこそ水はとをけれ／ほりかねの井はほどゝをし八瀬の里」は、堀兼の井は「八瀬の里」より遠いところにあると付ける。堀兼の井は武蔵国入間郡（埼玉県狭山市）の歌枕であるが、「武蔵野の堀兼の井もあるものを嬉しく水の近づきにける」（千載集・釈教・一二四一・藤原俊成）、「又とふさともおなじむさし野／夏の日はほりかねならぬ水もひて」（園塵第三・二六五一）などの用例に明

らかなように、その「掘り兼ね」るという名称より「水の出がたき井」（故事）として詠まれる。また、「八瀬の里」は、著名な山城国愛宕郡（京都市左京区）の八瀬ではなく、聖護院道興『廻国雑記』文明十八（一四八六）年条に、

堀兼の井見にまかりてよめる。今は高井戸といふ。
俤ぞ語るに残るむさしのやほりかねの井に水はなけれど
昔たれ心づくしの名をとめて水なき野べを堀かねのゐぞ
やせの里は、やがて此の続きにて侍り。
里人のやせといふ名や堀兼の井に水なきを侘びて住むらむ

とある「やせの里」であろう。それに「痩せ」を掛け、「水の出がたき」堀兼の井に水を求めてますます「痩せ」る餓鬼を詠じている。

ついでBの「がきの目にこそ水はとをけれ／海川の流は四方にみち〳〵て」は、海や川は四方に漫々たる状況でありながら、餓鬼の目にだけは水が遠いと、前句の「こそ」に逆接的に付けている。

さらにCの「がきの目にこそ水はとをけれ／人によるほりかねの井も法のため」は、「漸見湿地泥、決定知近水（漸く湿へる地泥を見ては、決定して水に近づきたりと知る）」（法華経・法師品）を踏まえ、「水の出がたき」堀兼の井も、人によっては仏法への道であると付ける。この付合の「水」は法水の意で、人間ならば、困難を克服して法水（仏の教え）に近づくことができると詠じている。なお、Cの付句は、『故事』の引用部分の直前に引かれた「みちなかこちそむさし野の原／人によるほりかねの井ぞ法の水」（新撰菟玖波集〈実隆本〉・釈教・三五四二・肖柏）と酷似するので、この肖柏句を改編したものであろう。

この三句について、『故事』では、Aについて心敬は「ほりかねの井、やせのさと、がきに同意の連歌也」と批判し、「我ならば」「餓鬼の首尾」が整うBを付けるという。さらに、堀兼の井を付けるのであれば、Cのような付け方をするように提案する。

一方、『基佐心敬問答』では、前句に「がきの目にこそ水はかたけれ」と小異があり、Cの代わりに、

D　がきの目にこそ水はかたけれ
　　草木だに露を命のならひにて

が収められる。

まず、前句に関しては、『故事』のAの付合で「遠し」の語が重なるため、『基佐心敬問答』の本文「水はかたけれ」が優位である。また、Dは、草木でさえも露によって命を保つことができるのに、餓鬼は水を得られないと付ける。これもBと同じく前句の「こそ」を生かした付け方であるが、Bよりも「ふ

びんの方も侍る」という。付句の「露を命のならひ」が、餓鬼の残酷な苦しみをより強調するというのであろう。

『基佐心敬問答』は、基佐の質問に心敬が答える形式で進められる。先掲した部分は心敬の発言に当たるが、『故事』にある「ほりかねの井、やせのさと、がきに同意の連歌也」や「餓鬼の首尾」といった言葉は、『基佐心敬問答』には見えない。それ故、『故事』が『基佐心敬問答』に依拠したと確言できないが、心敬の名前で語られるところに、両書が少なくともその淵源を等しくすることを推定して良いと思われる。

さらに、このA、Bには、先行する用例が見出される。

用にて付くるとは詞なるべし。

はてはかれのの露の夕暮

といふ句に、

したもえの草ばにかかる春の雨

てにはにて付けぬるを用のつけやうと申す。はてはのはの字にあたりて、秋の句に春にてつけて、うるはしくきこえてよく付けたるなり。

餓鬼のめにこそ水はかたけれ

といふ句に、

むさしののほりかねとほしやせのさと

これは体にてつくる。がきにやせの里、水のかたきにほりかねと、よりあひにてつくるは、三句めまで大事なり。

海川のながれはよもにみちみちて

と付けし用の付やう、当世なり。こそといふばかりにあたりて、よく付けたるなり。（雲玉和歌抄）

ここでは、体付と用付との区別が語られる。体付とは「よりあひにてつ」ける方法、用付とは「てにはにて付け」る方法を指す[14]。寄合を並べるのみの体付よりも、前句の助詞・助動詞など（てには・詞）に着目した繊細な付け方である用付を「当世」風と位置づける。A、Bに対する『雲玉抄』の評価は『故事』や『基佐心敬問答』と差はないが、そこに心敬の名前は見えない。

『雲玉抄』は、佐倉城主千葉勝胤に仕える衲叟馴窓の私家集である[15]。その奥書に永正十一（一五一四）年四月六日の年紀を持ち、また関東歌壇の指導的立場にあった木戸孝範と「ともだち」（孝範集・二八）であるなど、馴窓は永正年間前後の関東で有力な歌人であったらしい。馴窓の経歴から、『雲玉抄』は「関東歌壇の様相については詳しい事実を語っている」と見られる[16]が、Aの付合はその一例ではないか。「八瀬の里」が堀兼の井の近隣にあることを知らねば、Aの興趣は半減するからである。

さらに、Bに関しては、

餓鬼の目にこそ水はかたけれ
海かはのながれは四方にみち〳〵て　砌
是は、問答のこそ、ちがへ付ともいふなり。
（連歌秘伝抄）

という、『雲玉抄』を遡る可能性のある用例も見出せる。『連歌秘伝抄』は宗祇作とされる連歌論書であるが、その確証はない。Bは宗砌の作とされ（宗砌の句集には見えない）、前句の「こそ」に対比的に付けた例句である。

これらを単純に総合すると、もとは『連歌秘伝抄』のようにBのみであったのが、関東でAが増補され『雲玉抄』の形になり、そこにDが加えられて『基佐心敬問答』に、さらにCに改変されて『故事』に続いたとも推測できよう。ここで改めて問題となるのは、説話化の背景にある心敬の名声である。

おわりに

『雲玉抄』から『基佐心敬問答』『故事』へと進むにつれて、本来は心敬と無関係だった句が、心敬と関連付けて語られるようになっていた。ところで、長谷川論文は、『大原三吟』に収められる三名の中では、基佐の句に相対的に高い評価が与えられること、『大原三吟』に心敬の言説の影響が見られることを指摘する。基佐が連歌では心敬門であった[17]ことも考慮すると、『大原三吟』は心敬系統の論書であると大きく言うことができる。

『故事』は『岩橋』のような確実な心敬の著作、また『基佐心敬問答』のような（現在の目から見れば）伝心敬作の連歌論書も引用する。そこには、十六世紀関東連歌壇に生きる心敬の名声が看取できよう[18]。そのような状況の、最も著しい反映が、次の項目である。

41一、仙京

三月三日、光山、心敬、
紅の雪のそのふかも丶の花　心敬
此発句を聞人、まゆをひそめて、紅の雪とはふしぎなる御句哉と思しに、俄に空かきくもり、紅の雪はら〳〵とふるを、皆人是を見て、まぎれぬ心敬は仙人にてましますと云しと也。

某年三月三日、心敬が「光山」（未詳）にて、「紅の雪のそのふかも丶の花」と詠じたところ、空から紅の雪が降ってきた。そのため、発句の内容に不審を抱いていた人々も、「まぎれぬ心敬は仙人にてまします」と嘆声を上げたという。

「紅の雪」とは、『雲玉抄』三に「おしなべて誰得つつ見む白く散る春さへ雪の紫の庭／紫雪、紅雪、皆仙薬なり」とあるように仙薬の一種である[19]が、「山人の裁ち縫ひもせぬ袖なべて

紅深き雪を見るらん／山人とは仙人なり。仙人着たる衣は、裁ち縫ふ事なし。仙家に降る雪は紅なり」（秘蔵抄・一二）のように、「仙家に降る雪」とも考えられた。心敬の発句は、桃源郷に代表される桃花の仙境のイメージを用い、桃花が桃園に咲く様子を、まるで紅の雪が降ったかのようだと詠じたものである。

ところで、この句の本来の作者は心敬ではない。

三月三日

くれなゐの雪の園生か桃の花　（園塵第二[20]・一三〇八）

三月三日という日付けも、また句形も等しく、41「仙京」に引用される句は兼載の句である。

『故事』の成立を、ひとまず一五八〇年と仮定すれば、心敬の死去した文明七（一四七五）年からはほぼ百年が経っている。この百年の間に、心敬の名声は衰えるどころか、発句の作者を心敬に替え、「仙人」としての神格化さえなされている。先述したように、心敬が関東に下向したのは応仁元（一四六七）年で、彼の七十年に渡る人生の最後の九年間足らずを過ごしたにすぎない。しかも、「うけがたき世に生れてもなにならん都のほかの人と成せば」（文明三年正徹十三回忌追善百首・六六・旅）に明らかなように、心敬は関東に良い印象を抱いていたわけではなかった[21]。

それにもかかわらず、その死後に伝説となっているのは、心敬に対する人々の敬愛の念が根強く残っていた故である。心ならずも関東に下向した心敬であったが、当時の人々の熱烈な歓迎を受けたことは容易に想像できよう。まして、死後早くに、現代まで続く神格化がなされたのであれば、心敬も下向した甲斐があったというべきであろう。

【附記】

引用は本文ままを原則としたが、読みやすさを考慮して、改行を施し、句読点、濁点を付した。漢字は通行の字体に統一した。

【引用文献一覧】

和歌、『和漢朗詠集』は『新編国歌大観』に拠る。その他の引用文献は以下の通りである。

大原三吟……京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵貴重連歌資料集　第五巻』（臨川書店・二〇〇二年）　廻国雑記……高橋良雄・石川一・勢田勝郭・岸田依子・伊藤伸江『中世日記紀行文学全評釈集成　第七巻』（勉誠出版・二〇〇四年）　愚句老葉……金子金治郎編『連歌古注釈集』（角川書店・一九七九年）　軽塵……京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵貴重連歌資料集　第三巻』（臨川書店・二〇〇四年）

下草注〈伊地知本〉……『下草注』（早稲田大学図書館・伊地知鐵男文庫・文庫二〇／〇七八）。早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されているデジタル画像に拠る。　四道九品……木藤才蔵校注『連歌論集　四』（三弥井書店・一九九〇年）　芝草句内岩橋……金子金治郎編『連歌貴重文

献集成　第五集』（勉誠社・一九七九年）　新撰菟玖波集〈実隆本〉……天図書館理善本叢書和書之部編集委員会編『新撰菟玖波集実隆本』（八木書店・一九七五年）　春夢草〈内閣文庫本〉……『連歌古注釈集』　園塵第二・第三……廣木一人・松本麻子編『連歌大観　第二巻』（古典ライブラリー・二〇一七年）　文明三年正徹十三回忌追善百首……『続群書類従　第十四輯下』（続群書類従完成会・一九八三年）　無門関……西村恵信訳注『無門関』（岩波文庫・二〇一八年）　基佐心敬問答……『基佐心敬問答』（早稲田大学図書館・伊地知鐵男文庫・文庫二〇／一四九）。早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されているデジタル画像に拠る。　礼記……竹内照男『礼記　上』（新釈漢文大系27・一九八一年）　連歌秘伝抄……木藤才蔵校注『連歌論集　一』（三弥井書店・一九八二年）

【注】

（1）『故事』は、三井文庫旧蔵、カリフォルニア大学バークレー校現蔵の資料で、引用は国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムの紙焼き写真に拠る。

（2）「資料紹介　U・C・バークレー校蔵『古事類』――もう一つの『連集良材』――」（『国文学研究資料館調査研究報告』第9号）。

（3）「故事と連歌と講釈と――『故事本語本説連歌聞書』――」（「アジア遊学」第223号）。

（4）この通し番号は、渡辺論文の翻刻に付されたものに従っている。

（5）古注にも、「大唐にとらのおほき山に山居したる人あり。如何としてかゝるおそろしき山に住ぞと云し時、苛政猛虎とこたへたり」（春夢草〈内閣文庫本〉・七六四）、「苛政猛於虎と云心也」（愚句老葉〈自注〉・一七四七）、「もろこしの政道の事、苛政は虎よりもはげしといへる句の心をそこにはふくめり」（下草注〈伊地知本〉）とある。

（6）鈴木元「連歌師と本説、幼学」（『室町の歌学と連歌』〈新典社・一九九七年〉第一章3）は、2「卞和が玉」の本文が、『太平記』巻二十六「上杉畠山讒高家」に依拠することを指摘している。

（7）西山美香「「東山殿西指庵障子和歌」にみる〈禅の隠〉」（『武家政権と禅宗――夢窓疎石を中心に――』〈笠間書院・二〇〇四年〉Ⅲ部三章）に指摘がある。

（8）心敬の伝記については、金子金治郎「心敬の生活」（『心敬の生活と作品』〈桜楓社・一九八二年〉前編）、島津忠夫「心敬年譜考証」（『島津忠夫著作集　第四巻　心敬と宗祇』〈和泉書院・二〇〇四年〉第一章一）参照。特に関東における心敬については、拙稿「吉田文庫蔵『於関東発句付句』――解題と翻刻――」（島津忠夫監修『心敬十体和歌　評釈と研究』〈和泉書院・二〇一五年〉）を参照。

（9）「興俊大徳」は後の兼載か。湯之上早苗「兼載と興俊」（金子金治郎博士古稀記念論集編集委員会編『連歌と中世文芸』〈角川書店・一九七七年〉）参照。また、兼載については、金子金治郎『連歌師兼載伝考　新版』（桜楓社・一九七七年）参照。

（10）『故事』の通し番号・『岩橋』の句番号の形で示すと、3・一、6・二六一、10・三四九、18・二五七、23・三二一、26・三一九、44・八六・三一三・三三三・三一四・一〇七・二九九、56・三四五、59・二八一、60・二八七、62・三一七、65・三〇一・三〇二、67・一四七、86・二〇

六、87・五一、96・二六三、97・二八四の計23句である。

(11) 後掲宗祇句以外の一句は、「そのことのはのとくるともなし／雪の山ふたつの鳥の鳴ばかり」（出典未詳）である。

(12) 例えば、『愚句老葉』六九六の宗祇自注には、「天竺に雪山と云山あり。……彼鳥ども、寒苦逼身明夜巣造んと男鳥なけば、女鳥、何故造作栖安無常身と鳴と或経にみえたりとや」とある。なお、寒苦鳥の故事は「もと仏家による説法・法談の類が昔話化した」ものと推定される。佐竹昭広「寒苦鳥」、「雪山の鳥」（『佐竹昭広著作集　第五巻』〈岩波書店・二〇一〇年〉）参照。

(13) 長谷川千尋「『大原三吟』成立と諸本」（『京都大学蔵貴重連歌資料集　第五巻』）参照。

(14) 宗牧『四道九品』には、「一句の中、体の物に用を付るを用付と云なり。これあしき道也。……体付と云は、前句の物の名の外に、詞の字・てにをはなどをとりて、体有物にて付るを、体付と云なり。是を本とせり」とあり、体付とは用に体を付ける、用付とは体に用を付ける技法を指す。『雲玉抄』の用法とは異なっている。

(15) 『雲玉抄』、馴窓については、島津忠夫・井上宗雄編『雲玉和歌抄』（古典文庫・一九六八年）解題、島津忠夫「和歌と説話と――『雲玉和歌抄』をめぐって――」（『島津忠夫著作集　第八巻　和歌史下』〈和泉書院・二〇〇五年〉第十六章、井上宗雄「地方歌壇」（『中世歌壇史の研究　室町後期〔改訂新版〕』〈明治書院・一九九一年〉第二章9）参照。

(16) 注15前掲『雲玉和歌抄』解題参照。

(17) 島津忠夫「足なうてのぼりかねたる筑波山――基佐・宗祇確執をめぐって――」（『島津忠夫著作集　第四巻　心敬と宗祇』第二章十二）によれば、桜井基佐の句が『新撰菟玖波集』に入集しなかったのは、基佐と宗祇との間に確執があったからではなく、同じ心敬門として基佐と兼載とに確執があったからだという。

(18) 松本麻子「『雲玉和歌抄』と関東歌壇」（『連歌文芸の展開』〈風間書房・二〇一一年〉第五章第一節）は、関東歌壇が正徹の影響を受けていることを指摘する。その契機としては、言及される木戸孝範以外に、心敬こそその最有力候補であろう。『故事』の1、6（二首）、71にも正徹詠が引かれる。

(19) 飯島康志「平安期の貴薬「紅雪」について――中国の影響とその享受――」（『日本文学研究〈大東文化大学〉』第51号）参照。

(20) 『園塵第二』の草案本と目される『軽塵』にも、「三月三日／くれなゐの雪のそのふか桃の花」（二八）と同句形で収められる。

(21) 心敬の関東蔑視については、注8前掲拙稿参照。

（たけしま　かずき／熊本大学大学院人文社会科学研究部）